

- 1 . エジプトの国を出て第二年目の第一月に、主はシナイの荒野でモーセに告げて仰せられた。
- 2 . 「イスラエル人は、定められた時に、過越のいけにえをささげよ。
- 3 . あなたがたはこの月の十四日の夕暮れ、その定められた時に、それをささげなければならない。
そのすべてのおきてとすべての定めに従って、それをしなければならない。」
- 4 . そこでモーセはイスラエル人に、過越のいけにえをささげるように命じたので、
- 5 . 彼らはシナイの荒野で第一月の十四日の夕暮れに過越のいけにえをささげた。
イスラエル人はすべて主がモーセに命じられたとおりに行なった。
- 6 . しかし、人の死体によって身を汚し、その日に過越のいけにえをささげることができなかった人々がいた。
彼らはその日、モーセとアロンの前に近づいた。
- 7 . その人々は彼に言った。
「私たちは、人の死体によって身を汚しておりますが、
なぜ定められた時に、イスラエル人の中で、主へのささげ物をささげることを禁じられているのでしょうか。」
- 8 . するとモーセは彼らに言った。
「待っていなさい。
私は主があなたがたについてどのように命じられるかを聞こう。」
- 9 . 主はモーセに告げて仰せられた。
- 10 . 「イスラエル人に告げて言え。
あなたがたの、またはあなたがたの子孫のうちでだれかが、
もし死体によって身を汚しているか、遠い旅路にあるなら、その人は主に過越のいけにえをささげなければならない。
- 11 . 第二月の十四日の夕暮れに、それをささげなければならない。
種を入れないパンと苦菜といっしょにそれを食べなければならない。
- 12 . そのうちの少しでも朝まで残してはならない。
またその骨を一本でも折ってはならない。
すべて過越のいけにえのおきてに従ってそれをささげなければならない。
- 13 . 身がきよく、また旅にも出ていない者が、
過越のいけにえをささげることをやめたなら、その者はその民から断ち切られなければならない。
その者は定められた時に、主へのささげ物をささげなかったのであるから、自分の罪を負わなければならない。
- 14 . もし、あなたがたのところに異国人が在留していて、
主に過越のいけにえをささげようとするなら、過越のいけにえのおきてと、その定めとに従ってささげなければならない。
在留異国人にも、この国に生まれた者にも、あなたがたには、おきては一つである。」
- 15 . 幕屋を建てた日、雲があかしの天幕である幕屋をおおった。
それは、夕方には幕屋の上であって火のようなものになり、朝まであった。
- 16 . いつもこのようであって、昼は雲がそれをおおい、夜は火のように見えた。
- 17 . 雲が天幕を離れて上ると、すぐそのあとで、イスラエル人はいつも旅立った。
そして、雲がとどまるその場所で、イスラエル人は宿営していた。
- 18 . 主の命令によって、イスラエル人は旅立ち、主の命令によって宿営した。
雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営していた。
- 19 . 長い間、雲が幕屋の上にとどまるときには、イスラエル人は主の戒めを守って、旅立たなかった。
- 20 . また雲がわずかの間しか幕屋の上にとどまらないことがあっても、

彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。

21. 雲が夕方から朝までとどまるようなときがあっても、朝になって雲が上れば、彼らはただちに旅立った。

昼でも、夜でも、雲が上れば、彼らはいつも旅立った。

22. 二日でも、一月でも、あるいは一年でも、

雲が幕屋の上にとどまって去らなければ、イスラエル人は宿営して旅立たなかった。

ただ雲が上ったときだけ旅立った。

23. 彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。

彼らはモーセを通して示された主の命令によって、主の戒めを守った。

説教

民数記9章では、前半が過越の祭りについて、後半はイスラエルの全軍が具体的にどのように前進していったかが語られます。

まず、「定められた時」すなわち「第一月の十四日の夕暮れ」に「過越のいけにえ」をささげることが命じられます(2-3)。それで、イスラエルの人々は、「すべて主がモーセに命じられたとおり」、「エジプトの国を出て第二年目の第一月」の「十四日の夕暮れ」に過越のいけにえをささげます(4-5)。第一回目の過越の祭は一年前の出エジプトしたまさにその夜に行われましたが、そのちょうど一年後にエジプトを出てから最初の過越の祭がめでたく祝われたのでした。

でも、この時、過越のいけにえをささげたくてもささげられない人たちもいました。身内の葬儀があって亡骸に触れて「身を汚し」てしまった人たちです(6)。過越のまつりは「定められた時」に行くため、その時に身内が亡くなれば葬儀で「人の死体によって身を汚す」ことはやむを得ません。それで、彼らがモーセに尋ねて、モーセが神に伺いを立てると、神は次のようにお答えになりました。すなわち、イスラエル人のうち、「死体によって身を汚しているか」、あるいは「遠い遠路にあ」ったために「第一月の十四日の夕暮れ」に過越のいけにえをささげることができない者は、一ヶ月遅れで翌月の「第二月の十四日の夕暮れに、それをささげなければならない」と言うのです(9-11)。こうして、イスラエル人ならひとりの例外もなく全員が過越の祭を守ることを神はお命じになるのでした。

過越の祭は、イスラエルがエジプトを脱出する夜、ご命令通り小羊の血を門柱とかもいに塗った家には災いが過ぎ越したことを記念する、イスラエル最大の祭です。エジプトに下された十の災いのうち初子を殺すという最後の災いが決定打となって、エジプトの王ファラオは遂に全面降伏してイスラエルを解放しました。家族の身代わりに殺された小羊の血により災いから救われたイスラエルの全家は、その小羊の肉を、種を入れないパンと、エジプトでの苦難を忘れないための(レタス、チコリー、たんぼぼ、西洋わさびといった)苦菜を添えて、食べました(11)。食べにくくても、骨を折らずにみなでかじりつきながら、しかも朝まで残さず、一匹を家族(一族)で丸ごと食べ尽しました(12)。こうして、小羊の血によって罪を贖い、エジプトから救い出してくださった神の恵みを年に一度大きく記念してお祝いするのが過越の祭です。

この過越の祭は任意で自由に祝われるべき性質のものではなく、イスラエル人なら必ず祝わなければならないものです。ですから、既述の正当な理由無く「過越のいけにえをささげることがやめた」場合には、「自分の罪を負わなければならない」ために、「その者はその民から断ち切られなければならない」のでした(13)。直訳は「その魂が民から断ち切られる」で、死刑になるか追放されることを意味します。こうして、過越のいけにえにあずからない者は、殺されるか、あるいはイスラエルから除外されます。過越の祭を祝うかどうかは、イスラエル人にとっては死活問題なのです。ここにイスラエル人としてのアイデンティティーがあり、イスラエル人のいのちがある、とも言えます。過越の祭はイスラエル人の本質を意味しているのです。別の表現で言うならば、過越のいけにえにあずかる者が神の民イスラエル人であり、そうでない者は神の民イスラエル人ではないとも言えます。つまり、イスラエルがイスラエルであるということの本質は、イスラエル人が何が他の民族よりも立派に生きて恥じるということがないということにあるのではなく、小羊の血により罪を贖っていただいてその小羊の肉を丸ごと食べて生きる者とされたということにあります。どんなに罪深くても、永遠の昔から神が特別に愛して、傷なき小羊の血によって罪を贖ってくださった、そこに神の民が神の民であることの本質

があります。つまり、神の民、イスラエル人とは、神の絶対の恵みによって生かされている者のことを言うのです。それで、神の恵みを侮り、恵みの糧である過越のいけにえを拒否して食さない者は、神の民から除外されて、いのちを失います。

この過越のいけにえは、生けるまことの傷なき小羊であるイエスさまを象徴していることは言うまでもありません。イエスさまは過越のいけにえとして十字架で死なれました。そして、過越の食事に於いて、ご自分の血と称してぶどう酒を弟子たちに振るまい、ご自分のからだと称して種なしパンを弟子たちを与えます。こうして、イエスさまの血と肉にあずかるすべての弟子たちに神の民となる特権と永遠のいのちをお与えになりました。それで、今日、まことの過越のいけにえであるキリストの血により罪を贖われ、キリストの肉を食べて永遠に生きる者こそ神の民です。神の民とは要するに神の恵みを受けた者のことです。教会とは神の憐れみを受けた者たちの集まりです。神がくださる恵みの糧であるキリストの聖なる血と肉にあずかって生かされている者の集まり、それが教会です。キリストこそ、私たちキリスト者のライフラインです。

こうして、過越のいけにえを食べて生きるイスラエルの宿営のど真ん中であつた幕屋には、神の臨在があらわれます。神の臨在の「雲」が幕屋を覆います(15)。「雲」はその中がどうなっているのか見えません。空の雲の彼方に天国があるとよく考えられますが、そのように見えない「雲」の奥に神がいると考えられました。日が沈むとこの雲は「火のように」見えます(16)。昼も夜も、明るい時も暗い時も、どんな時にも、「いつもこのように」神は彼らと共におられ、雲(火)の柱をもってその臨在を彼らに示しました(16)。この雲は、単に彼らに神の臨在を示すだけではありません。彼らに行く手を示して彼らを守り導きました。神の臨在の雲は、夜は彼らを照らし(出エジプト 13:21)、追い迫るエジプトから守り(14:19-20)、シナイ山では彼らに律法を与えて行く道を示しました(19:18,24:15-18)。後にイスラエルが神に背いて呪いを受けた時にも、神の雲は彼らを離れず、彼らといつも共にあって、約束の地カナンまで責任をもって彼らを導きました。

イスラエルもまたこの雲の導きに従います。雲はいつも幕屋を覆っていますが、雲が幕屋を離れて上ると、彼らはそれに従いました。昼でも、夜でも、雲が上れば彼らも一緒に旅立ちます(民数記 9:21)。そして、雲がとどまるその場所で宿営しました(17)。右も左もわからず、しかも何も無い不毛の荒野に於いては、神の臨在の雲は彼らのいのちそのものでした。雲から離れたら荒野で野垂れ死にするしかありません。彼らが荒野で生き抜いて行く唯一の道は、雲のある所に一緒に居続ける以外にありません。それが何より安全です。神に従い行くことが彼らのいのちでした。それで、「彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った」と繰り返言われます(18,20,23)。「主の命令」と訳される **HP**, の原意は“口”です。それは「命令、決定」をも意味します。ですから、これは「彼らは主の決定によって宿営し、主の決定によって旅立った」とも訳せます。

もともとエジプトの奴隷であり、エジプトを出てからは全くの烏合の衆であつたイスラエルは、こうして神に従うことを学んでいきます。見渡す限り死と滅び以外に無い殺伐とした世界にあって、唯一彼らの生きる道は神と共にあることであり、神の恵みにとどまり続けることであることを学んでいくのです。幼い乳飲み子は、親から離れて、一人では生きていけません。ちょうどそのように、神と共にあり、神に従うことは私たちのいのちなのです。

私たちも同じです。神無くして、私たちは生きていくことができません。神の恵みによって救われた私たちは、その恵みの中にとどまり続けることが何より重要です。神の恵みの交わりの中にあり続けなければなりません。イスラエルのように、「**モーセを通して示された主の命令**」に従わなければなりません(23)。神と共に歩まねばなりません。神と共にあるとはどういう意味でしょうか。神が語りたもうところにあるということです。神が語りたもうところに従って歩むことを意味します。「**彼らはモーセを通して示された主の命令によって**」とは、「モーセの手による神のことばの上に立って」が直訳です。

ここに集うみなさんひとりひとりが、生涯、神と共に歩んでいかれるよう、主の御名により祈ります。